

ベトナム語の関係節におけるマーカについて

mà の出現条件を中心に

Dinh Thi Kim Cuong
(筑波大学・博士課程)

ベトナム語の関係節において、mà は主名詞と名詞修飾節を繋げる関係詞である。Do&Dao (2019)などの先行研究では“mà”の出現は任意であるとされるが、実際には、mà が必須となる場合がある。本発表では Keenan & Comrie (1977)が主張した「名詞句接近可能性階層」を参照しながら、ベトナム語の関係節における mà のふるまい(behavior)を次のように明らかにした。

A. 主語 (Subject) 直接目的語 (Direct object) 及び比較の対象 (Comparison)

これらの場合は関係詞 mà が任意である (Do&Dao 2019)。しかし、主名詞が定名詞句の場合は関係節構文を成立させるためには、người (人)などを主名詞の直後に置くことが必要で、その場合には mà も必須となる。

B. 間接目的語 (Indirect object)

Aと同じく、主名詞が定名詞句の場合は、mà とその直前の người などが必須のものとなる。また、文中に主語として使われる関係節の場合は、意味が曖昧にならないように、関係詞 mà が必須となる。

C. 斜格名詞句 (Oblique)

斜格名詞句のうち、具格名詞句の場合は、英語と異なり、ベトナム語の関係節においては関係代名詞や相関接続詞 (correlative) などを挿入せずに、関係詞 mà が任意である。一方、共格ほかの場合は、相関接続詞とともに関係詞 mà が必須になる。すなわち、斜格の中でも、具格の場合と、具格以外の場合ではタイプが異なっている可能性がある。

D. 属格名詞句 (Genitive)

ベトナム語において、この場合は関係節構文が成り立つのは難しいと考える。

主要参考文献

Danh Thanh DO, Huy Linh Dao (2019) “The Vietnamese polyfunctional marker MÀ as a generalized linker: A multilevel approach” *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society*, pp. 58 – 71.

Edward L. Keenan, Bernard Comrie (1977) “Noun phrase accessibility and Universal grammar” *Linguistic Inquiry*, Winter Vol. 8, No. 1, pp. 63- 99.

【自由研究発表第3セッション 12月9日 10:25-11:00 C会場 2B208・209教室】

ベトナム南中部山地ラグライ人の慣習実践におけるモラルティと審美性

康 陽球

(国立民族学博物館・外来研究員)

本発表の目的は、ラグライ人の慣習実践におけるモラルティと審美性の関係を検討することである。ベトナム南中部の山地に居住するラグライ人の慣習（アダット）は、「祖先の教え」として口承され、自然環境の利用方法、土地制度、財産の継承方法やセクシュアリティに関わる禁忌、禁忌を犯した際の賠償方法などを定めてきた。アダットは東南アジアの島嶼部や沿海域に広くみられ、慣習的土地制度に対する植民地政府の関心からその研究が始まったが、当初からアダットと道徳的・宗教的関心との関連性が指摘されてきた。近年の東南アジアの精霊信仰に関する研究では、アダットの宗教的側面についての考察が進んでおり、アダットは霊的な力の流れを制御し、豊穡や多産、健康や繁栄を達成するための実践の総体であると理解されている。本発表では、力の流れの制御というアダットの宗教的側面を認めつつも、アダットに関わる一連の儀礼的实践が、道徳的な生き方と美の追求にも関わっていることを、ラグライ人社会における道徳性と審美性の関係に注目して明らかにする。

そのために本発表では、ラグライ語の「ラゲ(laghe)」という単語に着目する。ラゲは、「美しい」「好ましい」と訳すことができ、第一に、儀礼の効果を占うモノの形状や儀礼的パフォーマンスの審美性を評価するさいに使用される。第二に、ラゲという言葉は、道徳的な行為の評価にも使われる。たとえば、母系制のラグライ人社会において、母方オジとメイ（姉妹の娘）の関係が重視されるが、オジへの配慮を示すメイの振る舞いは、ラゲだと評価される。

このように、ラゲという単語は、美的感性にもとづく評価と道徳的な判断の両方を表現するために使われるが、ラグライ人にとって両者は重なり合っている。たとえば、ラグライ人の婚礼において、婚前交渉がなかった場合とあった場合、いずれの場合も同じようにブタが供犠されることが多いが、前者はブタを共食する祭宴、後者は祖霊や親族、両親に対する賠償の供犠として区別されている。発表者は、両者の間に際立った審美的要素の違いを見いだすことができなかったが、調査地の人々は、前者の儀礼に参加した感想を、まるで素晴らしい儀礼的パフォーマンスに立ち会った後のように「美しかった」と述べる。儀礼が開催される道徳的な文脈は、儀礼の審美的評価を左右する。

先行研究が指摘しているように、本研究調査地の人々も、祖先の教えに則った儀礼的手続きの遂行は、一族の繁栄と存続を可能にすると語る。ただし、何が正しい方法であるのかは常に明確ではなく、さらに近年の急激な社会変容のなかで、「祖先の教え」の蓋然性は揺らいでいる。そのような不確かさのなかで、ラグライ人の慣習実践は、一族の存続や繁栄という大きな目的を見据えた意志や、威信や名声の獲得、社会的連帯の強化のための戦略的な判断だけでなく、道徳的感性と不可分な美の追求という情熱によっても支えられている。

【自由研究発表第5セッション 12月9日 13:00-13:35 C会場 2B208・209教室】

19世紀後半、ベトナム阮朝による対ヨーロッパ使節派遣の再検討

多賀 良寛

(東北学院大学)

フランスによる植民地侵略が加速するなか、ベトナムの阮朝は1860年代から70年代にかけ、複数回にわたりヨーロッパへ外交使節を派遣する。このうち本発表が検討対象とするのは、先行研究でもほとんど言及されていない、1878年の使節派遣である。阮朝硃本をはじめとするベトナム側の未公刊史料をフランス語史料と組み合わせることで、従来知られていなかった使節派遣の全貌と、その歴史的意義とを明らかにする。

使節派遣の契機として重要なのは、1874年に阮朝とフランスとの間で締結された、第二次サイゴン条約である。フランスは同条約の第5条にしたがい、阮朝に複数の蒸気船を贈与したが、1878年の使節派遣は、この贈与に対する返礼使として企画されたものであった。あわせて嗣徳帝は、この使節派遣によって、失地回復に向けた外交交渉の糸口を掴むことも期待していた。いっぽうフランス側は、1878年にパリで開催予定の万国博覧会に阮朝を招待しようとしており、最終的には外交使節と万博特使の2グループからなる使節団が、ヨーロッパに派遣されるに至った。外交使節の代表にはヨーロッパへの渡航経験を有する阮増陞が、万博特使にはサイゴンで対仏交渉の実務を担っていた阮誠意がそれぞれ任命されている。

1878年2月にフランスに到着した使節団は、パリで大統領への謁見を果たす。その後、阮誠意一行はパリにとどまり、万博に参加した。万博公式カタログによれば、阮朝は螺鈿細工や金属工芸品など50を超える特産品を展示している。阮誠意は帰国後、万博会場の様子や他国の出品状況について詳細なレポートを提出した。これに対し阮増陞らの一行は、陸路でスペインへと移動し、マドリードでスペイン国王と面会した。約5月にわたるヨーロッパ滞在中、通訳として使節団を支えたのは、ベトナム人キリスト教徒の阮有琚である。彼の残した日記は、使節団の旅程を復元するための最重要史料をなす。

使節団は1878年に9月に無事帰国するが、責任者の阮増陞や阮誠意は、具体的な外交的成果が見られなかったとして嗣徳帝の譴責を受けた。そのいっぽう、使節団によってもたらされたヨーロッパ情報は今までにない量・質のものであり、その後の阮朝の対外認識や外交戦略に少なからぬ影響を与えた。ヨーロッパの持つ科学技術面での優位性が今まで以上に強く認識された結果、使節団の帰国後間もなく、フランスへの留学生派遣計画が立ち上がった。外交戦略においては、欧米勢力間の勢力均衡をうまく利用し、フランスの支配的地位を相対化することが試みられていく。この目的のため、阮朝はスペインをはじめとするヨーロッパ諸国との外交交渉に、より積極的な使節を見せるようになった。万国博覧会はそうした外交戦略にとって格好の機会であり、フランス側史料によれば、阮朝は1883年にアムステルダムで開かれる博覧会への参加をも検討していた。